

Hudek, A., Kopeček, M., Mervart, J. (eds.), *Czechoslovakism*, New York, 2021.

佐藤 ひとみ
SATO Hitomi

東京外国語大学大学院博士後期課程
Tokyo University of Foreign Studies, Doctoral Student

中辻 柚珠
NAKATSUJI Yuzu

京都大学大学院文学研究科博士後期課程
Kyoto University, Graduate School of Letters, Doctoral Student

キーワード

チェコスロヴァキア主義 ナショナリズム 国民性 市民権 チェコスロヴァキア・ネイション

Keywords

Czechoslovakism; Nationalism; Nationhood; Citizenship; Czechoslovak Nation

原稿受理日：2023.1.26.

Quadrante, No.25 (2023), pp.237–248.

目次

はじめに

1. 本書の問題意識
 2. チェコスロヴァキア・ネイションをいかに代表するか
 3. 第二次大戦後におけるチェコスロヴァキア主義とチェコスロヴァキア・ネイションの存在理念
- おわりに

はじめに

第一次世界大戦の結果として誕生したチェコスロヴァキア第一共和国は、チェコ人とスロヴァキア人を国家の主要構成ネイションとし、その他にもドイツ人、ハンガリー人、ポーランド人、ユダヤ人といったナショナル・マイノリティを抱えていた国家であった。チェコスロヴァキア国家は1992年に解体されることとなったが、

この国家において、諸ネイションの歴史を考えるうえで重要となり、ネイション形成にとって影響を与えた概念の1つが「チェコスロヴァキア主義」である。

本稿が扱う論集『チェコスロヴァキア主義』の中心的な編者であり、序章を担当した歴史家のコペチェクによれば、歴史上の人物によるチェコスロヴァキア主義の解釈の仕方は2つあり、そのことは多くの研究者によっても認知されてきた。1つは、チェコ人とスロヴァキア人は単一のエスニックなネイションであり、かつ常にそうあり続けたのであって、スロヴァキア語はチェコ語の方言に過ぎず、「スロヴァキア人は事実上チェコ人である」¹というものである。そして2つ目は、チェコスロヴァキア・ネイションは、チェコ人とスロヴァキア人という2つの「部族」から構成され、それらの「部族」が「より高度な」政

¹ Kopeček, M., “Czechoslovakism: the concept’s blurry history”, in: Hudek, A., et al. (eds.), *Czechoslovakism*, Routledge, 2021, p.5. コペチェクは先行する諸研究の認識をこのように示しているが、これはバッケの1999年の研究で提示された「第一共和国の国家イデオロギーであるチェコスロヴァキア主義には、少なくとも2つの意味があった。それは、チェコスロヴァキア・ネイションはチェコ人とスロヴァキア人という2つの「部族」によって構成されるという意味と、スロヴァキア人は発展が遅れているだけで、実際にはチェコ人である、という意味であった」という見解を踏襲したものと思われる。Bakke, E., *Doomed to Failure? The Czechoslovak Nation Project and the Slovak Autonomist 1918-1938*, University of Oslo, 1999, p.179. しかし、「スロヴァキア人は事実上チェコ人である」とするのであればチェコスロヴァキア主義は成立しないのではないかという疑問も生じうる。したがって、この定義には議論の余地があることをここで付言しておく。



治的な連合体を形成するというものであった²。

しかし同時に、「チェコスロヴァキア主義」は、この概念を用いる書き手の歴史認識が反映される論争的な概念でもあった。コペチェクは、この概念は当初から否定的な意味合いを含んでおり、特にスロヴァキアにおいて頻繁に批判されていたが、反対にチェコでは擁護される傾向にあったことを指摘する³。フデク、コペチェク、メルヴァルトを編者とし、16人の研究者によって編まれた本論集『チェコスロヴァキア主義』は、チェコスロヴァキア解体から四半世紀以上たった今、チェコスロヴァキア主義を、付随するチェコ人とスロヴァキア人による政治的なプロジェクトやイデオロギーとしてだけでなく、多面的な歴史現象として捉え直すために執筆された⁴。

1. 本書の問題意識

本書は、2019年にチェコ語及びスロヴァキア語で発表された同名の論集に加筆修正し、さらにバツケの研究論文を加えて2021年に発表された英語の論集である⁵。序章では、本論集が編まれた意義が明示されている。そこで以下では、本論集の問題意識を序章に即して提示したい。コペチェクはまず、チェコスロヴァキア主義そのものを扱った先行研究が意外なほど少ないことを指摘する。一方、チェコおよびスロヴァキアのナショナルな運動の歴史や、チェコとスロヴァキアの関係史などについては、無数

の歴史文献が存在しているという⁶。

またコペチェクは、スロヴァキア側の文脈でチェコスロヴァキア主義を扱った研究と、チェコ側の文脈でチェコスロヴァキア主義を扱った研究の間には大きな偏りがあることを指摘する。チェコスロヴァキア主義は、先述の通り書き手の歴史認識が反映される概念であり、筆者によれば、チェコスロヴァキア主義をめぐる言説は、この概念を批判するスロヴァキアの自治主義者と、スロヴァキア内でチェコとの連帯を唱える「チェコスロヴァキア主義者」⁷たちとの政治的対立のなかで生み出されてきた⁸。そのためチェコ側の文脈でチェコスロヴァキア主義が検討されることはほとんどなかったという。そこで本論集では、チェコ、スロヴァキア双方でこれまで行われてきた議論の差異を埋めることを目的としている。

次に、チェコスロヴァキア主義研究の時代的偏りが指摘される。これまで多くの研究者は、文化的概念としてのチェコスロヴァキア主義が政治プログラムへ転換する過程に関心を寄せ、19世紀後半、特に世紀末に注目してきた。また、この概念は19世紀の文化的な相互連関、第一共和国における国家統合のイデオロギー、そして1930年代後半の崩壊という物語として特徴づけられると指摘する⁹。それゆえ、第二次大戦後を扱った歴史研究においてチェコスロヴァキア主義はほとんど欠落している。しかしコペチェクは、中央集権であれ連邦制であ

² Kopeček, *op. cit.*, p.5.

³ *Ibid.*, p.6.

⁴ *Ibid.*, p.2.

⁵ チェコ語およびスロヴァキア語の書誌情報は以下の通りである。Hudek, A., Kopeček, M., Mervart, J., *Čechoslovakismus*, Praha, 2019.

⁶ Kopeček, *op. cit.*, p.4.

⁷ 「チェコスロヴァキア主義者」とはチェコスロヴァキア主義を支持する者を指すが、それは蔑称として用いられることもあった。例えば1959年に刊行された『スロヴァキア語辞典』では、「チェコスロヴァキア人」を政治用語かつ蔑称とし、「チェコスロヴァキア主義の支持者」と定義づけている。„čechoslovák“, Peciar, Štefan, *Slovník slovenského jazyka I*, Slovenská Akadémia Vied, 1959, p.196.

⁸ Kopeček, *op. cit.*, pp.7-8.

⁹ *Ibid.*, pp.5-8.

れ、共通国家には何らかの共通のアイデンティティ、すなわち「チェコスロヴァキア性」が必要だったと主張する。そのため、本論集は第二次大戦後のチェコスロヴァキア主義についても問うことを目的としている¹⁰。

またコペチェクは、チェコスロヴァキア主義が持つ概念的歴史、論争的で時に矛盾する意味、特異な時間性と歴史的層性、特異な多義性は、他の類似した歴史的現象、例えば「ユーゴスラヴィア主義」などとは異なると述べる。しかし同時に、これらの概念は、それぞれ非常に異なった歴史的・文化的な層を含みながらも、複数の近代的なネイションがより高度なネイション、あるいはネイションを超えるような全体へと統合され、それによって新しいタイプのネイションが創造されるという点で共通していることが指摘される。本書は、これらの歴史的現象を将来的に比較分析するための基本的な前提条件を作り出すためにも執筆された¹¹。

さらに、チェコスロヴァキア主義研究は、チェコスロヴァキア主義の構成要員として必ずしも指定されていない、あるいはそのように理解されていない様々な集団的アイデンティティにも注意を払わなければならないことが主張される。これらのアイデンティティに属する人々は、「チェコスロヴァキア・ネイション」の創設に参加することを意識的に望んでいたわけでも、あるいは国家愛国主義（自由民主主義、マルクス主義、社会主義）を支持していたわけでもない。しかしそれでも、そのような人々は、様々な形のチェコスロヴァキア性あるいはチェコスロヴァキア・アイデンティティに属していた。そしてそのチェコスロヴァキア・アイデンティティとは、例えばチェコスロヴァキア系ドイツ人やチェコスロヴァキア系ハンガリー人といった形

で、彼らのエスニックな言語的アイデンティティと補完しあうものだったのである¹²。

以上のことから、本論集の目的は以下のようにまとめられるだろう。すなわちその1つは、これまで地域的にも時代的にも偏った状態で論じられてきたチェコスロヴァキア主義という概念を、より体系的に論じるというものである。次に、チェコスロヴァキア主義をチェコスロヴァキアのネイション形成という文脈から捉え直すというものである。これまでも、チェコスロヴァキア主義はチェコ人とスロヴァキア人によるチェコスロヴァキア・ネイションの形成という意味合いで論じられてきた。しかし序章で述べられる通り、本論集はチェコスロヴァキア主義を政治綱領やイデオロギーとしてではなく、より多面的な現象として捉えることを試みている。そしてその多面的な現象とは、チェコ人とスロヴァキア人の関係史やその政治綱領に収斂していくものではない。それは、複数のネイションが統合され新たな形のネイションが創造される様相や、無自覚にチェコスロヴァキア・ネイションに組み込まれていた集団の存在を検討することによって明らかにされるのである。ここで重要となるのは、チェコ人とスロヴァキア人に限定されない多様なチェコスロヴァキア国家市民が、チェコスロヴァキア・ネイションの構築にいかなる意味を持ったかを論じることだろう。

コペチェクは、たとえチェコスロヴァキア・ネイションの形成が現実には達成されなかったものだとしても、それを理由にチェコスロヴァキア主義を歴史的に実現不可能な事象だったと断定することは相応しくないという。なぜなら、チェコスロヴァキア・ネイションをまったく非現実的なものと見なす語りは、エスニックなアイデンティティを所与のものと見なす本質主義を

¹⁰ *Ibid.*, pp.11-12.

¹¹ *Ibid.*, pp.14-15.

¹² *Ibid.*, p.16.

暗に前提としているからである¹³。それゆえ本論集は、チェコスロヴァキア主義を、実現が目指されたチェコスロヴァキア・ネイション形成の試みとして多面的に論じるのである。

これらを目的として書かれたそれぞれの論文は、第一共和国誕生以前、第一共和国期、第二次大戦後と、時代ごとに3つに区分されている。本書の目次は以下のとおりである。

序章 M. コペチェク「チェコスロヴァキア主義——本概念の曖昧な歴史」

第1部 チェコスロヴァキア以前のチェコスロヴァキア主義

1. V. ドウベク「潜在的チェコスロヴァキア主義——19世紀リベラル・エリートの中で政治化する議題」

2. K. ホリー「20世紀転換期におけるチェコスロヴァキア主義の議論」

3. L. ヴェレシュ「1895年から1914年におけるハンガリーの行政機関、管理・監督当局、およびチェコスロヴァキア主義の運動——監察、誤解、対抗策」

4. M. サボー「『ユダヤ人はスロヴァキアの不幸』——19世紀末から20世紀前半におけるチェコスロヴァキア主義と反ユダヤ主義」

第2部 「国民国家」建設期におけるチェコスロヴァキア主義

5. E. バツェ「1918年から1938年の政府就任討論におけるチェコ人政治家のチェコスロヴァキア主義に対する理解」

6. M. ドウハーチェク「チェコスロヴァキア共和国前半期におけるチェコスロヴァキア主義——国家建設の概念か、ただの古びたフレーズか」

7. R. アルパーシュ、M. ハヌラ「戦間期におけるスロヴァキア系主要政治勢力のチェコスロヴァキア主義概念に対する態度」

8. Z. マルチャーレク「国家＝市民概念としてのチェコスロヴァキア主義の失敗——1918年から1945年における軍隊のナショナル・マイノリティ」

9. M. ミヘラ「第一共和国期における国家の祝典とチェコスロヴァキアというナショナルな共同体の建設」

10. D. ナードヴォルニーコヴァー「1918年から1938年に出版されたチェコ側の歴史の教科書と公民教育の教科書に見るチェコスロヴァキア主義思想」

11. M. バルトロヴァー「チェコスロヴァキア造形芸術」

第3部 共産党独裁と民主化への移行の時代のチェコスロヴァキア主義

12. J. ベンコ、A. フデク「スロヴァキア人共産主義者とチェコスロヴァキア主義のイデオロギー」

13. Z. ドスコチル「1960年代の改革期におけるチェコスロヴァキア主義と人民主義」

14. J. メルヴァルト「チェコスロヴァキア主義と『民族問題』の党理論」

15. T. ザフラドニーチェク「1989年から1992年の連邦制末期におけるチェコスロヴァキア主義とチェコスロヴァキア・アイデンティティをめぐる議論」

16. N. クメチ「1989年以降のスロヴァキアにおけるチェコスロヴァキア主義の問題」

17. O. ヴォイチェホフスキー、B. モスコヴィチ、J. ペリカーン「20世紀におけるユーゴスラヴィア主義——展開と傾向」

それぞれの論文はテーマごとに次のように大別できるだろう。まず、本論集において最も多く占められるのが、チェコないしスロヴァキアで、チェコ人もしくはスロヴァキア人によって論じられたチェコスロヴァキア主義を検討したも

¹³ *Ibid.*, p.2.

のである。この研究には、1章、2章、6章、7章、9章、10章、11章、12章、13章、15章、16章が該当する。これらの研究には、チェコ側・スロヴァキア側双方の主張を相互に比較したものから、チェコないしスロヴァキアの片方の地域に限定し、そこで論じられたチェコスロヴァキア主義を検討した論文までが含まれる。次に挙げられるのが、チェコスロヴァキア主義を国家市民的なネイション形成に寄与する概念と規定し、そのネイション形成が実際どの程度行われたのかを概観する研究である。これは、5章と8章が挙げられる。その他の研究としては、ハンガリーの行政とチェコスロヴァキア主義の関係に力点を置いた3章、チェコスロヴァキア主義と反ユダヤ主義を論じた4章、共産党の党理論がいかにかにチェコスロヴァキア主義を規定したのかを論じた14章、ユーゴスラヴィア主義を論じた17章が挙げられる。

チェコスロヴァキア主義は、チェコ人とスロヴァキア人による単一のチェコスロヴァキア・ネイションの形成の試みであったと同時に、多様なエスニック集団を含むチェコスロヴァキア・ネイション形成の試みでもあった。また国内の多様なネイションに属する人々やネイション形成に距離をおく人々にも作用する力を持った思想・運動でもあった。チェコスロヴァキア主義がこれまでチェコ人とスロヴァキア人の「関係史」を前提としつつ、スロヴァキアの文脈において論じられてきたのに対して、本書はその多様な側面を取り上げることが目的としている。しかし本書にはチェコ人とスロヴァキア人の対立の図式を再生産するものも収録されている。本稿では、斬新な挑戦を試みる本書の魅力を論じながら、同時にその限界の源がどこにあるのかを考えてみたい。

そこで本稿では、まずチェコスロヴァキア主義がチェコ人とスロヴァキア人の対立と連帯の問題として捉えられた特定の論考を引き合い

に出し、そこで扱われた史料を市民性の観点から実際に読み直してみることで、従来の分析視角にひそむ課題を具体的事例に即して提示する。次に、第二次大戦後における議論を、国家市民的な視点から概観する。そして、チェコスロヴァキア・ネイションの存在理念に着目することで、この議論をより広い文脈で捉えることの可能性を示す。なおここではすべての収録論文を扱うものではない。

2. チェコスロヴァキア・ネイションをいかに代表するか

前節の通り、本書はチェコスロヴァキア主義の多義性という視点から、「チェコスロヴァキア」という名称が、エスニックなチェコ人とスロヴァキア人の一体性だけでなく、多様なエスニック集団が住まう国家も指すものであったことを重視し、広く国家の市民がチェコスロヴァキア性の構築に与えた影響にも注意を向けている。しかし、論集全体の内容に関する先の整理にも明らかのように、国家市民的観点からチェコスロヴァキア主義を考察したものはごくわずかである。多くの論文は文化的相互連帯としてのチェコスロヴァキア・ネイションが「政治的ネイション」に変容する過程に着目しているが、ここで検討される「政治的ネイション」の構成主体はほとんどの論考においてチェコ人とスロヴァキア人である。そのため、コペチェクの挑戦的で先進的な問題設定にもかかわらず、本論集の多くの論考は、全体としてチェコスロヴァキア主義の歴史をチェコ人とスロヴァキア人の二項対立の歴史に収斂させてしまっている。以下では、この二項対立を克服するために、チェコスロヴァキア性の構築の歴史を、チェコスロヴァキアという国家で生きた市民全体に目を向けつつ再検討していく可能性について考察したい。

まず、本論集では全体として、チェコスロヴァ

キア共和国の市民であったはずのドイツ人やハンガリー人といったマイノリティの存在が視点からほとんど取りこぼされている。例外として、第5章のバツケと第8章のマルチャーレクは、これらエスニック・マイノリティを含めたチェコスロヴァキア主義の可能性(とその失敗)に焦点を当てている。前者は政治家の就任演説、後者は軍隊の資料を参照し、ともに市民的チェコスロヴァキア理念は失敗に終わったと結論づけている。コペチェクも指摘する通り、たとえ多くの住民が言語に基づいて個々のエスニック集団に属していたのだとしても、チェコスロヴァキアという国家に住んでいる限りは、何らかのチェコスロヴァキア性ないしチェコスロヴァキア・アイデンティティが人びとの中に存在していたはずである。例えば、以下のような問いを立てることが可能だろう。世界的に著名な人物や組織は国を代表する存在となりえたはずだが、自らをドイツ人やハンガリー人と位置づけるマイノリティにとってもかれら／それらは同郷の誇りたりえたのだろうか。仮にそうであるならば、エスニシティの問題はどの程度人びとにとって重要であったのだろうか。また、芸術やマスメディアにおいては、チェコスロヴァキア性はどのように表象され、そこでエスニシティの問題はどう位置づけられたのか。

実際のところ、チェコスロヴァキア性の表象に関する論稿は本書にも2本収められている。第9章と第11章がそれにあたる。これらは、チェコスロヴァキア主義の歴史をチェコ人とスロヴァキア人の対立と連帯の歴史として古典的に捉えている。しかし、少なくとも第11章で

扱われた史料は、こうした二項対立とは異なるチェコスロヴァキア性の形を示しているように思われる。

第11章は、「チェコスロヴァキア造形芸術というカテゴリーが[...] チェコの芸術史によっていかに自明のものとして上から構築されたか」を考察した論文である¹⁴。著者のバルトロヴァーによれば、長らくチェコとスロヴァキアの両美術史は非対称な関係性にあり、スロヴァキアでは第二次世界大戦期以降チェコスロヴァキア芸術はテーマ化さえされず、他方チェコの美術史ではチェコスロヴァキア芸術が事実上のチェコ芸術を意味してきた¹⁵。

しかし、特定の集団的アイデンティティを表明するものとして「チェコスロヴァキア芸術」という概念を定式化しようとする試みがまったくなかったわけではない。その事例としてバルトロヴァーが注目したのが、ウィーン学派に学び、戦間期に活躍した美術史家ズデニェク・ヴィルトである。ヴィルトは、1935年に『チェコスロヴァキア総覧』という叢書の芸術の巻にあたる第8巻の編者の一人を務め、そこに収録された300頁以上に及ぶ「チェコスロヴァキアにおける造形芸術」というパートの編集および序文とあとがきの執筆を担当した人物である¹⁶。ヴィルトの本著作は、19世紀中葉までとそれ以降の2部構成になっており、前半部は「チェコスロヴァキア地域の」芸術様式ごとに、後半部は個々のナショナルな文化ごとに執筆されている¹⁷。後半部は「チェコスロヴァキア芸術」、「チェコスロヴァキア共和国におけるドイツ人芸術」、「旧上部ハンガリーの芸術」の3章で構成されており、さらに「チェコスロヴァキア芸術」の章

¹⁴ Bartlová, M., “Czechoslovak visual arts”, in: A. Hudek et al. (eds.), *op. cit.*, p. 295.

¹⁵ *Ibid.*, p.294.

¹⁶ Wirth, Z., et al., “Výtvarné umění v Československu”, in: Branbergr, J., et al. (eds.), *Československá vlastivěda VIII. Umění*, Praha, 1935, pp.7-322.

¹⁷ Bartlová, *op. cit.*, p.297.

はボヘミア、モラヴィア＝シレジア、スロヴァキアの3つに分けられている¹⁸。また、ヴィルトはあとがきにおいて、「チェコスロヴァキアの芸術家たちは常にネイションの声であり続けるだろう」と述べ、「チェコスロヴァキア芸術」を、地理的独自性を有する概念として解釈している¹⁹。この点を指してバルトロヴァーは、ヴィルトの思想に、造形芸術を「血縁関係や人種によって定義されるナショナル・アイデンティティの真の表明」と見なす当時のヨーロッパのコンセンサスが反映されていると分析する²⁰。

「チェコスロヴァキア芸術」をチェコスロヴァキア人のアイデンティティを表すものとして提示したヴィルトの議論は確かに興味深く、重要なものである。しかし、バルトロヴァーによれば、この定式化は1935年の著作においてようやく成立したものであり、彼の1920年代の著作は上記のような「チェコスロヴァキア芸術」観を示してはいない。例として、ヴィルトの著作である『チェコスロヴァキア芸術』（1926年）と『チェコスロヴァキアの人びとの芸術』（1928年）という本を引き合いに出し、「チェコスロヴァキア」という形容詞を冠する両著作がともにスロヴァキアには言及していないことを指摘している²¹。なお、スロヴァキアを無視するこのような立場は決して孤立したものではなく、例えば建国10周年を記念して組織された展覧会のカタログ『1918年から1928年のチェコスロヴァキア造形芸術』にも同様の傾向が見られたという。バルトロヴァーの整理するところによれば、本カタログに掲載される800を超える作品はチェコ人芸術家とドイツ人芸術家で占められており、スロヴァキア人はほとんどいない²²。

整理すると、バルトロヴァーの考えでは、ヴィルトの1935年の著作はチェコスロヴァキア主義を体現した数少ない試みの1つであるが、1920年代のヴィルトの著作はチェコスロヴァキア主義の著作には当たらない。しかし、コペチェクの問題意識に従えば、「チェコスロヴァキア」のラベルを冠した幅広い事象もチェコスロヴァキア主義の問題群に含まれるはずである。そのようにチェコスロヴァキア主義を広く解釈することは、決して「チェコスロヴァキア」を称しながら事実上チェコ側のことしか扱っていないという従来状況の強化を意図することではない。評者が強調したいのは、内実としてスロヴァキアが含まれていない「チェコスロヴァキア」のラベルを冠したものが、実際に「チェコスロヴァキア性」として人びとの認識の中で構築されていたのだとしたら、それはやはり「チェコスロヴァキア主義」の問題として扱われるべきではないかということである。

興味深いことに、先述の「1918年から1928年のチェコスロヴァキア造形芸術」展のカタログの絵画の部は、4分の1をドイツ人が占めていたという²³。スロヴァキア人芸術家への注意の欠如と並行して、ドイツ人芸術家が「チェコスロヴァキア芸術」のカテゴリー内で重要性を占めていたことが分かる。当時、国内のドイツ人マイノリティとのバランスは非常に重要な問題であり、これは、ある意味では国内のチェコ人・ドイツ人の両市民をチェコスロヴァキア国民として包含しようとする試みだったと言える。また、1935年の「チェコスロヴァキアにおける造形芸術」も、こうした傾向を失っていたわけではない。バルトロヴァーは、ヴィルトの

¹⁸ *Ibid.*

¹⁹ *Ibid.*, pp.318-321.

²⁰ *Ibid.*, pp.299-300.

²¹ *Ibid.*, p.297.

²² *Ibid.*, pp.297-298.

²³ *Ibid.*, p.298.

中で「チェコスロヴァキア芸術」という枠組みの中にスロヴァキアが加わったことを重視し、彼の20年代の著作からの変化を強調するが、評者の目には、チェコスロヴァキア国内の複雑なエスニシティのありように配慮する試み自体は20年代から一貫しているものと見える。実際、1926年の著作の方では、扱う対象として、「現地の環境に溶け込んだ帰化外国人」も含まれるとする説明がなされていた²⁴。

国内の市民すべてを代表できるよう考慮することと、どのようなカテゴリーに属する人びとを考慮に入れれば市民全体を考慮することとなるかという問題は、深く関連し合うものである。このような市民性とエスニシティの連関を問うていくためには、現在ネイションやエスニック・グループとして自明視されているものの枠組み自体を疑っていく視角が必要となろう。実際、バルトロヴァーの事例に鑑みても、戦間期においては、「チェコスロヴァキア」はもちろんのこと、「チェコ」と「スロヴァキア」のラベルが指すところも一枚岩ではなかったと推察される。コペチェクも指摘していることであるが、従来の研究では、チェコ系の論者が述べるチェコスロヴァキア主義は、戦前のチェコ・ネイションのナラティブを拡張したものすぎないとして捉えられてきた²⁵。しかし、第11章の事例を見る限り、スロヴァキアを無視したチェコスロヴァキア性(事実上のチェコ性)に、「ドイツ人」が含まれることはありえたのだと分かる。これは、言

語＝民族主義的な戦前のナラティブとは異なるものである。ゆえに、チェコ性もまた、チェコスロヴァキア国家という枠組みの中で、常にその何たるかが問われ、再定義されていったものであったと言える。したがって、今後チェコスロヴァキア主義をより深く考えていくためには、「チェコ人」と「スロヴァキア人」という主体自体を自明のものとして前提化しない視座が必要となろう。

この際、ナショナルリティに所属しない、あるいはできないといった状況にも目を向けると、議論は一層広がりを持つだろう²⁶。戦間期のチェコスロヴァキアでは国勢調査にナショナルリティを問う項目が設けられていたが、タラ・ザーラによれば、1930年の調査では、統計局側から「ナショナルリティなし」あるいは「ナショナルリティ不明」の項目を設ける案が浮上していた²⁷。この案は結局実現されずに終わるが、このことが示唆するのは、戦間期のチェコスロヴァキアという「国民国家」が建国された時代においてすら、ナショナルリティに対する人びとの帰属意識は曖昧であったということである。また、ナショナルリティという概念の妥当性に対し、科学的に疑問を呈する知識人もいた。例えば、哲学者で生物学者のエマヌエル・ラードルは、ナショナルリティを客観的指標であるかのように扱う国勢調査の手法を批判している²⁸。こうした状況においては、「チェコスロヴァキア市民」という枠組みは、ナショナルリティを超克する、あるいはそれ

²⁴ *Ibid.*, p.297.

²⁵ 対称的に、スロヴァキア側では、チェコスロヴァキア主義はスロヴァキア・ネイションのナラティブのより根本的な再構築を要するものと捉えられてきた。Kopeček, *op. cit.*, p.8.

²⁶ これを近年の研究では一般に「ナショナル・インディファレンス」と呼ぶ。ただし、この概念の定義については曖昧さが指摘されている。中辻柚珠「二〇世紀転換期プラハにおける芸術界とナショナリズム——マーネス造形芸術家協会を中心に」『史林』104-6、2021年、6-9頁。

²⁷ なお、ここでいう「ナショナルリティ národnost」とは、国籍のことではなく、ネイションへの所属のことである。Zahra, Tara, *Kidnapped Souls: National Indifference and the Battle for Children in the Bohemian Lands, 1900-1948*, Cornell University Press, 2008, p.124.

²⁸ ラードルについては、本論集の第5章や第6章でも言及がある。しかし、例外的な事例として周縁的に指摘されるに留まっている。Bakke, E., "Conceptions of Czechoslovakism among Czech politicians in government inauguration debates 1918-1938", in: Hudek, A., et al. (eds.), *op. cit.*, p.154; Ducháček, M., "Czechoslovakism in the first half of the Czechoslovak Republic: State-building concept or hackneyed old phrase?", in: *Ibid.*, pp.179-180.

と対立する概念ともなる。チェコスロヴァキア国家の失敗に目を向けるのであれば、エスニックなチェコスロヴァキア人の形成の失敗だけでなく、市民的チェコスロヴァキア人の形成の失敗にもより焦点が当てられるべきではないか。市民性からエスニシティまでに広がるチェコスロヴァキア性を多角的に検討していく必要がある。

3. 第二次大戦後におけるチェコスロヴァキア主義とチェコスロヴァキア・ネイションの存在理念

これまで、チェコスロヴァキア主義を市民性という視点から論じてきた。それでは、チェコスロヴァキア主義が否定され、チェコ人とスロヴァキア人のネイションとしての存在が憲法に明記された社会主義期から、連邦解体へ向かっていく時代において、チェコスロヴァキア主義はどのような意味を持っただろうか。コペチェクによれば、第二次大戦以降、チェコスロヴァキア・ネイションが正式に否定されたにもかかわらず、その時代にも何かしらの「チェコスロヴァキア性」が存在していた。また、チェコスロヴァキア・ネイションの実現が失敗したからと言って、その存在が無視されてはならないだろう。第二次大戦後において何かしらの形で存在したかもしれないチェコスロヴァキア・ネイションと、その存在理念を本論集から問うてみたい。

第二次大戦後を扱った第3部の叙述は、チェコスロヴァキア主義がスロヴァキアで否定的に評価されたことを指摘する傾向にある。そのなかで、チェコスロヴァキア・ネイションの問題に取り組んだのが、第15章を執筆したザフラド

ニーチェクである。筆者は、正常化体制期末期から1992年にかけて、誰が、いつ、どのような文脈で「チェコスロヴァキア主義」という言葉を使い、それがどのような内容であったかを検証した。具体的には、正常化体制期末期と体制転換直後の作家や知識人たちの議論と、連邦議会、国民評議会におけるチェコスロヴァキア主義の議論を、チェコとスロヴァキア環境から双方向的に概観している²⁹。そしてチェコスロヴァキア主義に対する評価という意味で、1989年以降のチェコ社会とスロヴァキア社会には大きな差があったことを明らかにした。

ザフラドニーチェクは体制転換前後の議論において、作家や研究者の議論を検討しながら、チェコスロヴァキア主義という言葉が彼らによってどのように用いられたかを検討している。例えば1990年には、チェコの作家であり、1968年に『二千語宣言』を発表したヴァツリークが、「我々のスロヴァキア問題」という論考を発表した。ザフラドニーチェクは、ヴァツリークの「…子どもの頃から、私はチェコスロヴァキア国家のことを考えてきた。…偉大なスロヴァキア人は皆、私にとってのチェコスロヴァキア人だった」³⁰という主張を紹介する。そしてそのうえで、ヴァツリークが主張する「チェコスロヴァキア人」とは、教育や生い立ちによって獲得されるチェコの「ナショナルリティ」に基づき形成される、市民的アイデンティティという意味での、ナショナルな帰属意識であることを指摘する³¹。すなわち著者は、ヴァツリークの主張を引き合いに出しながら、継承されてきたチェコのアイデンティティが、チェコスロヴァキアという言葉

²⁹ Zahradníček, T., "Debates on Czechoslovakism and Czechoslovak identity in the closing years of the federation, 1989-1992.", in: *Ibid.*, pp.396-397.

³⁰ ヴァツリークは偉大なスロヴァキア人をチェコ人だと表現するが、その後同じ論考において、チェコ人を「兄」、スロヴァキア人を「弟」だとも述べている。そして、当時行われていた国家形態や国名を巡る議論を背景に、「弟」であるスロヴァキア人が成長した結果、スロヴァキア人は「兄」であるチェコ人からさらなる権利を主張するようになったと述べる。このことから、ザフラドニーチェクが指摘する通り、ヴァツリークが言うところのチェコスロヴァキア人とは、チェコの市民アイデンティティと同義であったことが伺える。Vaculík, L, "Naše slovenská otázka", *Literární novina*, 1990, no.11, p.2.[<http://archiv.ucl.cas.cz/index.php?path=LitNIII/1.1990/13/7.png>]

³¹ Zahradníček, *op. cit.*, pp.400-401.

からチェコという言葉へ再び書き直されようとしたこと、そしてじょじょに、チェコのナショナル・アイデンティティが宣言されるようになっていったことを明らかにしたのである³²。

ここでは、「チェコスロヴァキア人」と冠されるアイデンティティの内実が、実際にはチェコ人であることが指摘されている。しかし、バルトロヴァーでの議論と同様に序論の目的に立ちかえるのであれば、重要なのは、チェコ人とスロヴァキア人に限定されないチェコスロヴァキアに暮らす市民が、何らかの形でチェコスロヴァキア・ネーションとして想像されることである。これを踏まえるのであれば、ヴァツリークの議論が想像する「チェコスロヴァキア人」は実際にチェコ人であるため、それが政治的ネーションとしても、国家市民的なネーションとしても「失敗」だった、と結論づけることは本質的な議論ではない。重要なのは、ヴァツリークが描く「チェコスロヴァキア人」の存在は、何によって可能になるのかということである。

ザフラドニーチェクの研究において、チェコスロヴァキア人はチェコ人によって構成される存在であるが、そのチェコ人という枠組は自明とされている。それではチェコ人とは、同じ教育を受けた者全てが成り得た存在だったのだろうか。チェコスロヴァキア・ネーションの存在と、それを構成する集団は、常に互いに作用しながら形を変えていった。チェコスロヴァキア・ネーションの構成要素となる諸ネーションを自明のものとしてせず、どのような理念に基づき、誰がチェコスロヴァキア・ネーションを構成すると考えられたのか、すなわちチェコスロヴァキア・ネーションの存在理念を論ずる必要があるように思われる。チェコスロヴァキア・ネーションを国家市民的な意味合いで論じることにより、

その存在理念というこれまでとは異なる視点での研究が可能になると評者は考える。

ザフラドニーチェクはまた、チェコの社会学者であるチェルマークの論稿『チェコスロヴァキア・ネーションのための追悼』を紹介する。そしてチェルマークが、チェコスロヴァキア主義はヨーロッパの西と東を統合するという意味で時代に先駆けており、チェコスロヴァキア・アイデンティティとは、様々なネーションや異なる言語を使用する市民にとっても現実的な選択肢だったと考えていたことが明らかにされた³³。つまりここでは、チェコ人とスロヴァキア人に限定されないチェコスロヴァキア・ネーションが第一共和国によって誕生し、現在でも存在していることが示されているのである。ザフラドニーチェクは、連邦解体前に行われた国勢調査により、チェルマークの主張が現実には耐えうるものではなかったことを指摘する³⁴。しかし、やはりここで疑問となるのは、チェコスロヴァキア・ネーションの実現可能性よりも、その存在理念である。

チェルマークは、チェコスロヴァキア・アイデンティティがチェコ人とスロヴァキア人以外の多様なネーションによって構成されることを明言している。彼の議論の中では、チェコ人とスロヴァキア人による政治的なネーションではなく、チェコスロヴァキア国家に暮らす多様な市民がチェコスロヴァキア・ネーションとして想像されていると言えよう。それでは、チェルマークが論じるチェコスロヴァキア・ネーションとは、チェコスロヴァキア国家に暮らす全ての人間が自動的になり得るものだったのか。それとも、一定の理念を共有して初めて実現されるべきものだったのだろうか。

チェコスロヴァキア・ネーションの存在理念

³² *Ibid.*, p.412.

³³ *Ibid.*, p.401.

³⁴ *Ibid.*

は、ザフアドニーチェクの議論にとどまらず、第二次大戦後の文脈で検討可能であろう。例えば、スロヴァキア出身のマルクス主義哲学の研究者であり、社会主義期に反体制派として活躍していたクスィーは、チェコ、スロヴァキア両地域において自治が与えられたうえで、チェコスロヴァキア・ネーションというアイデンティティを新たに創造するべきだと主張していた³⁵。彼はまた、スロヴァキアに存在していたハンガリー・マイノリティに関心を持ち、ハンガリー系の反体制派と交流を持っていた。体制転換後のスロヴァキアでナショナリズムの高揚が訴えられるようになると、ナショナリティの問題を扱うための理論的枠組の提示を試み、その枠組を援用しつつ、マイノリティの問題に取り組んだ³⁶。

クスィーは1991年に発表した「マイノリティの集団権利」という論考のなかで、スロヴァキア人は、チェコ人に対して自分達がマイノリティであると主張するが、国内において、彼らはハンガリー人に対してはマジョリティであると述べる。クスィーによると、マイノリティはマジョリティの権利行使によって脅かされていると感じているため、マジョリティが主張する権利と、同等の権利を獲得しようと努力するという³⁷。

クスィーは、こういった権利保障は国家によって行われるが、国民国家は少数派のエスニックおよびネーション集団よりも、国家形成において多数派を占めるネーションを優遇すると指摘する。そして国家が多数派を占めるネーションの権利を優先させる場合、国家は、マイノリティに対しマジョリティと同等の権利を認めるか、強制的な同化を起す。だからこそ、複雑な補

償制度と抑圧を避けるためにも、民主的な国家はできる限り市民的な水準、つまり、すべての人に共通するものを国家の基礎とし、諸ネーションの権利の問題については最小限の介入を行うべきだと、クスィーは主張した。クスィーは、市民的原則に基づいた国家を支持したと言えるだろう³⁸。

クスィーは、チェコスロヴァキア国家における市民的原則の明確な定義をしていない。しかし、この議論を踏まえるのであれば、クスィーにとってのチェコスロヴァキア・ネーションとは、チェコ人とスロヴァキア人に限定されるのではない、市民的原則という理念を共有する国家市民を意味していた可能性がある。

チェコスロヴァキア・ネーションが想像される以上、その議論はチェコスロヴァキア主義の問題として論じることが可能だろう。本論集の国家市民的なチェコスロヴァキア・ネーションという理解を手がかりに、チェコスロヴァキア主義やチェコスロヴァキア・ネーションを論じた言説に着目する、あるいは再解釈を行うことで、チェコスロヴァキア・ネーションの実現可能性やその失敗した過程ではなく、その概念に期待された理念を明らかにすることに繋がると評者は考える。

おわりに

本書はチェコスロヴァキア主義を、政治綱領やイデオロギーとしての議論のみに収斂させず、チェコスロヴァキアのネーション形成という文脈でも捉え直すことを目的に編まれた。しかし同時に、本論集で行われた研究の多くは、「既存の」チェコ人とスロヴァキア人によって取り組

³⁵ 佐藤ひとみ、「正常化体制期における『チェコスロヴァキア主義』——1980年代のスロヴァキア知識人による歴史議論——」、『東欧史研究』第44号、2022年、7-11頁。

³⁶ Trencsenyi, B., Kopeček, M., (eds.), *A History of Modern Political Thought in East Central Europe*, Oxford, 2018, p.266.

³⁷ Kusý, M., *Čo s našimi Maďarmi*, Kalligram, 1998, p.19.

³⁸ *Ibid.*, pp.18-21.

まれた問題としてチェコスロヴァキア主義を限定的に捉えている。その結果、「チェコスロヴァキア主義」という新しい視点を得ながらも、チェコスロヴァキア・ネイションはこれまで通り政治綱領の文脈のなかでとらえられてしまうのである。本稿では、チェコスロヴァキア国内を生き延びた幅広い市民の存在に目を向け、彼らのネイションへの統合を試みるチェコスロヴァキア主義が実際の研究のなかでどう扱われたのか、もしくは今後いかに応用可能かを論じてきた。こうした国家市民的なネイションの形成で問題となるのは、どういった理由で、何を目的として、いかなる理念によって、国内の多様な人びとがチェコスロヴァキア・ネイションとして想像されたのかということである。その際、チェコスロヴァキア・ネイションの一員として想定される集団を自明の存在として、実体的に捉えてはならない。チェコスロヴァキア・ネイションとの関係の中で変化していった個々の諸集団のアイデンティティも論じられるべきだろう。ただし、本稿で扱えなかったこととして、なぜチェコ人とスロヴァキア人という二項対立がこれほどまでに強固に前提とされたままなのかという問題がある。それを、本質主義的な態度として一蹴することは容易かもしれない。しかし、構築主義的な見方が少なくとも学术界に十分に根付いた今日において、世界中でナショナリズムが再び高まっていることに鑑みれば、「チェコ人」や「スロヴァキア人」といった枠組みを要する人びとの論理にも改めて目を配る必要があるように思われる。こうした課題に応じてこそ、市民的ネイションの模索の歴史を探求することにも一層意味が生まれるだろう。以上の課題を共有しつつ、本稿を閉じたい。